

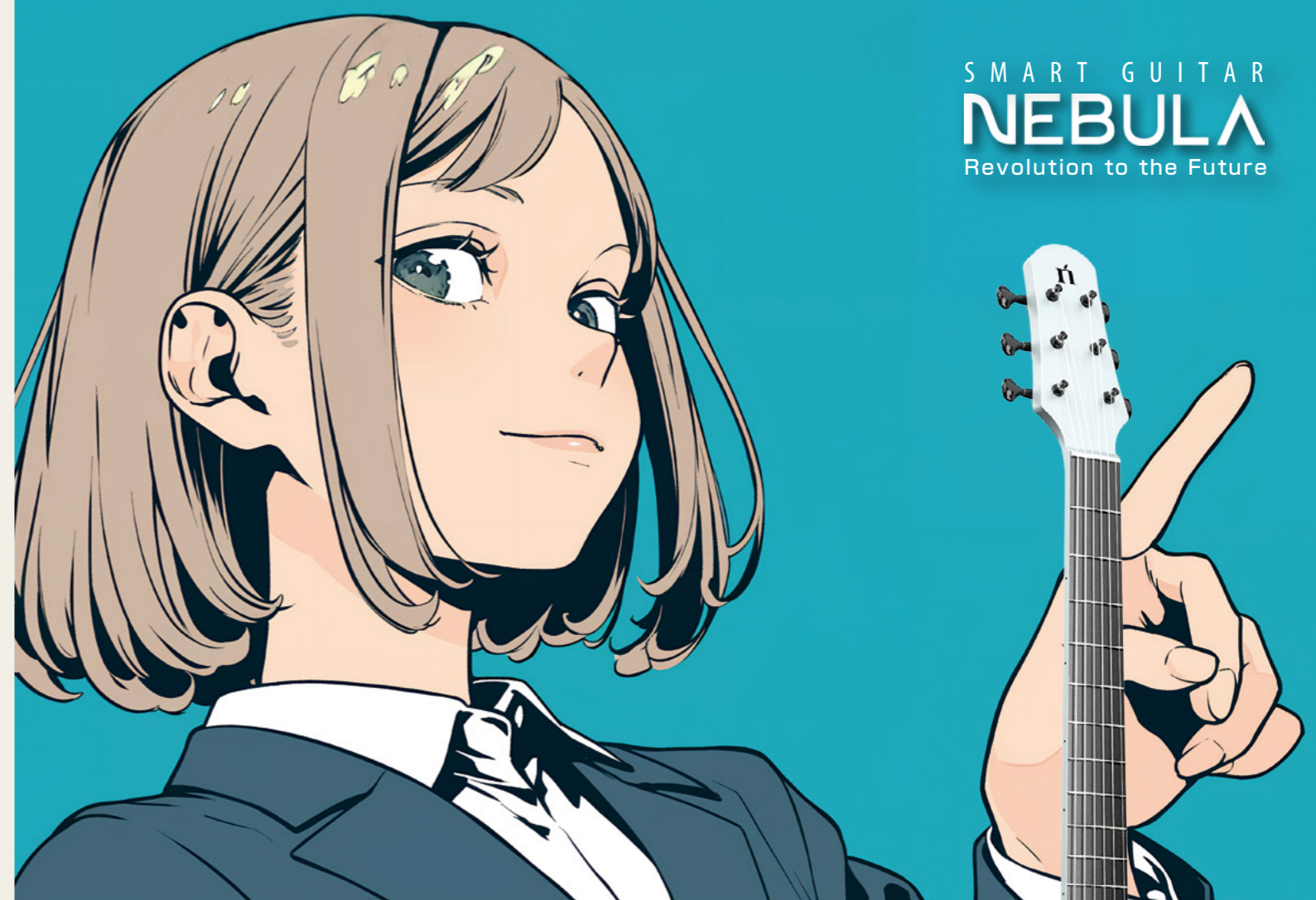
軽音楽部マガジン

発行：特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会 配布：全国 2,140 校の高等学校軽音楽部



第8回 高等学校軽音楽コンテスト関東大会より

軽音楽部ってどんな部活？
 軽音楽部にもマネージメントの発想を…

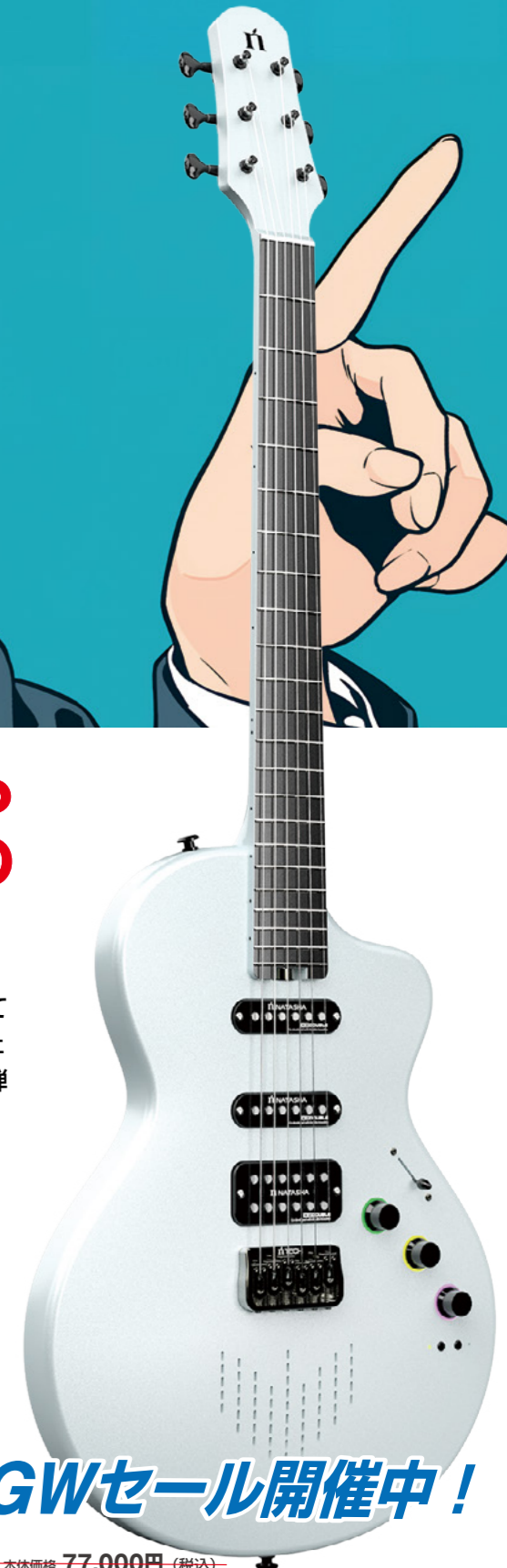


SMART GUITAR
NEBULA
 Revolution to the Future

ヘッドフォンで演奏が楽しめる スピーカー、エフェクト内蔵の SMART なギター

アンプへの接続はもちろん、ヘッドフォン端子やスピーカーを内蔵。軽くて丈夫なカーボンファイバーを本体に採用し、多彩な音作りを実現するエフェクターやチューナー、メトロノーム、ルーパーを搭載。いつでもどこでも「弾きたい!」と思った瞬間に演奏できる、スマートなギターです。

- 1 スピーカー搭載で、面倒な準備をスキップ
- 2 ヘッドフォンを接続すれば、夜間の演奏も◎
- 3 ワンタッチでエフェクトが切り替わる
- 4 豊富なエフェクト群を自由にカスタマイズ
- 5 演奏をサポートしてくれる様々な便利機能
- 6 USB Type-C 対応でギターの録音が簡単に
- 7 高温多湿に強く、軽量なカーボン素材
- 8 丈夫で使いやすい高機能なギグバッグ付属



GWセール開催中!

本体価格 77,000円 (税込)

55,000円 (税込)



nebulaguitar.jp



全国約4,800校の 高校に軽音楽部を!

※現在、軽音楽部があるのは**2,140校**です (令和8年4月1日当協会調べ)

軽音楽部の諸活動を通して若者の成長を応援しています

1 軽音楽部の正しい理解を

軽音楽部は部活動としての歴史が浅く、ポピュラーミュージックやバンドへの偏見も一部に残っており、正しく理解されていないのが実状です。STEAM教育の一端として、軽音楽を通じた部活動の有意義さや得られるものを学校内外へ広めていきます。

2 軽音楽部の全国普及に向けて

学校教育の一環である部活動のひとつとして、軽音楽部が全国の学校に設立されることを目指し、日々の練習や演奏会のサポート、楽器や機材の相談、各種クリニックや大会の開催など、諸活動をバックアップしていきます。

3 新しい活動の提案と支援

デジタル化、IoT化による現代的な楽器や機材、DTMの普及による新しい軽音楽のスタイルなど、今と未来に見合った活動を各業界とのパイプ役として軽音楽部に提案、支援しつつ、軽音楽のポップカルチャーとしての発展を目指します。

当協会の理念や活動内容にご賛同いただける方々のご寄付をお待ちしております
詳しくはこちらまで…



特別賛助会員の皆様 (敬称略/順不同)

株式会社未常識	ギブソン・ブランド・ジャパン株式会社
公益財団法人かけはし芸術文化振興財団	フェンダーミュージック株式会社
一般社団法人サトヤマカイギ	株式会社トップトラベルサービス
宝塚大学	株式会社コスモエージェンシー
日本工学院専門学校/日本工学院八王子専門学校	音楽ロッヂ ゆうげん荘
専門学校東京ビジュアルアーツ・アカデミー	株式会社オーティーズ
名古屋スクールオブミュージック&ダンス専門学校	

特定非営利活動法人
全国学校軽音楽部協会
keionkyo.org



全国学校軽音楽部協会

軽音楽部マガジン

令和8年5月号 VOL.91

■軽音楽部マガジン VOL.91 ■創刊：平成25年12月18日(水) ■第15巻2号通巻91号
■監修・発行/特定非営利活動法人(NPO法人)全国学校軽音楽部協会 JASLMC (Japan Association of School Light Music Club)
〒224-0003 横浜市区中川中央1-37-6-405 TEL: 045-913-0901 FAX: 045-913-1900 E-Mail: info@keionkyo.org
■企画・編集/株式会社未常識

軽音楽部ってどんな部活?4

軽音楽部にもマネージメントの発想を…8

特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会 副理事長 辻 伸介

From Chief-In-Editor

「バンド活動」を「教育」へと昇華させるために

新緑の季節を迎え、校内に新しい楽器の音が響き始める新学期がやってきました。新入部員を迎え、活気に満ちたバンドが次々と誕生するこの時期は、指導に当たる顧問の先生方にとっても、顧問の役割や軽音楽部のあり方を再定義する重要なチャンスです。今、改めて私たちが向き合わなければならない問いがあります。それは「趣味としてのバンド」と「部活動としてのバンド」の違いについてです。

「趣味」が崩壊を招く「部活動」の危機

音楽は本来、自由で楽しいものです。しかし、学校教育における部活動として取り組む以上、そこには明確な「教育目的」が介在しなければなりません。もしも部活動が単なる個人の趣味や娯楽の延長線上に終始してしまったり、それは教育活動としての土台が崩壊していると言わざるを得ません。趣味としての音楽であれば、誰からも干渉されず、好きな時に好きなように演奏すれば事足ります。そこには高度な指導の必要性も、組織としての規律も求められません。しかし、部活動が「教育の一環」であるならば、そこには音楽の技術習得を超えた、人間形成のプロセスが不可欠です。趣味に走る集団は、壁にぶつかった際に容易に霧散しますが、教育的要素を持つ「部活動」は、困難を乗り越える過程で生徒たちを大きく成長させます。この「教育的担保」があるからこそ、教員が顧問として存在する意義があるのです。

顧問の役目は「ティーチング」から「コーチング」へ

では、顧問の役割とは何でしょうか。多くの先生方が「自分には楽器の専門知識がないから」と悩まれますが、結論から言えば、顧問が個々の生徒に楽器の技術指導を行う必要はありません。顧問の真の役目は、生徒たちが自ら考え、判断し、行動する「自主自立(自律)」を促すことにあります。バンドと

いう最小単位の社会の中で、いかに合意形成を図り、共通の目標に向かって団体として機能するか。その環境を整え、生徒の背中を押す「コーチ」としての立ち振る舞いが求められているのです。具体的な楽器の演奏技術については、経験豊富な上級生が教える文化を醸成したり、プロの外部指導員に委ねたりするのが健全な姿です。その分、顧問の先生方は「幹部生徒の育成」や「外部指導員への教育的ルールの共有」に注力すべきです。生徒を直接指導するのではなく、「指導する立場にある者」を教育すること。これこそが、多忙を極める現代の教員にとって、持続可能かつ最も教育効果の高い指導のあり方ではないでしょうか。

「活動そのもの」から「生徒の変容」へ

最後に、先生方のマインドセットについても触れたいと思います。私たちは「部活動という場そのものが好き」という視点から一歩踏み出し、「部活動を通して生徒が変化し、成長していく姿を見るのが好き」という意識へと転換していかなければなりません。音楽を手段として、いかにコミュニケーション能力や忍耐力、チームワークといった非認知能力を育てていくか。その手応えを感じるからこそ、顧問としての真の醍醐味であるはず。全国学校軽音楽部協会(軽音協)としても、この新しい時代の指導指針を強力にサポートしていきます。今後は、先生方がより自信を持って生徒を導けるよう、コーチング手法に関する勉強会などの開催を本格的に検討してまいります。この一年が、生徒たちにとって、そして先生方にとっても、音楽を通じたかけがえのない成長の場となることを切に願っております。共に、軽音楽部の新しいスタンダードを築いていきましょう。

特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会 理事長 三谷佳之

軽音楽部ってどんな部活？

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。4月から新しい学校生活とともに部活動も始まります。軽音楽部は全国で入部者数が増えている、近年人気が高い注目度ナンバー1の部活動です。活動内容は学校によって様々ですが、人気の秘密の一部を紹介しましょう！

音楽は私たちの生活に潤いを与え、心を豊かにしてくれる素晴らしいものです。きっと皆さんもいろいろな場面で音楽と出会い、感動し、「今度は自分が演奏する側にまわりたい！」と思ったのではないのでしょうか。自分の歌や演奏が誰かの心を動かしたり、感動させることができたら素敵ですよね。でも、それはフリのアーティストに限らず、皆さんにだってできること。音楽は聴くことはもちろん、歌ったり、演奏することも楽しく、素晴らしいものなのです。

軽音楽部は「部活動」

よく誤解されるのですが、軽音楽部の活動と、いわゆる「高校生バンド」は似ているようで、違います。軽音楽部はバンドが集まってできているのではなく、部活動の中でバンドに分かれて活動していくものです。もちろん高校生がバンド単位で活動するわけなので

「高校生バンド」には変わりありませんが、軽音楽部は部活動なので、学校や周囲に認められて教室や備品を使うことができ、音楽を通して成長することが目的です。学外で活動している高校生バンドとは、そもそも目指すものや活動内容が違います。

高校の軽音楽部では楽器の練習をしたり、バンドで楽曲を演奏するだけではなく、部全体で様々な目標に向かっていきます。文化祭や定期演奏会でのライブ、他校との合同演奏会やコンテストへの参加、クリニックやセミナーの受講、夏合宿の実施…など、部活動だからできることがたくさんあります。

新しいことを始める時は誰でもドキドキするものです。不安も多いと思いますが、部活動の良いところは先輩や顧問の先生、学校によってはコーチなどの指導者がいることです。練習の方法からトラブル対処のアドバイスまで、悩みごとができて頼れる人たちがいるということが、部活動であることの最大の強みです。

軽音楽部で学べること

軽音楽部は文化部に属します。軽音楽部が他の部活動と大きく違う点は「クリエイティブティ」と「チームワーク」の両方を学べることです。基本的に、運動部にはクリエイティブティというキーワードはありません。文化部はチームで何かを生み出すというよりも、個人での創作活動がメインです。同じ音楽系部活動である吹奏楽部や合唱部ではチームとしての連帯感や協調性は育まれますが、創作性はありません。一方、軽音楽部は「バンド」という少人数のチームで、コミュニケーションを取りながら、自分たちの手で音楽を作り上げていくところが大きな特徴です。

これからの社会では、記憶型・受動型タイプの人間ではなく、自ら考え、周囲の人たちと協力しながら実行していける力が求められています。運動部と文化部の良いところを持つ、クリエイティブティとチームワークの両方を兼ね備えたハイブリッドな部活動、それが軽音楽部の魅力であり、ポピュ



ラー・ミュージックの楽しさなのです。音楽は一生ものです。軽音楽部で得たことは卒業した後も必ず活かされ、人生にきっと素敵な華を添えてくれるでしょう。ぜひ皆さんも軽音楽を通して、たくさんを経験し、充実した高校生活を送ってください。

歌や楽器の練習に取り組み

軽音楽部で使用する楽器は、主にギター、ベース、ドラム、キーボードです。パーカッションをはじめとした他の楽器を使用しても構いませんが、メインとなるのは上記の4つの楽器です。そこにボーカルが加わりますが、ボーカリストとして歌だけを歌うことも、ギターやベース、ドラムなどを演奏しながら歌うことも可能です。学校によっては「卒業するまで（私はギター）」「僕はドラム」という風に担当楽器を固定するのではなく、1学期や2学期などの学期ごとや演奏する楽曲ごとに担当パートを変えたり、バンドを組み直すところもあります。当然ながら、各楽器の練習量や苦労は増えますが、複数の楽器を練習することで相乗効果が起こり、音楽スキル全体の向上につながると言えます。

軽音楽部の中には、入部して初めて楽器に触れる人も多いと思います。特にポピュラー・ミュージックで使う楽器はドラム以外は電気を使用するので、楽器の構え方や音を出す方法、音作りや周辺機材の使い方も学ぶ必要があります。機材の扱い方など、わからないことは先輩にどんどん質問して欲しいのですが、歌や楽器の技術的な上達は個人練習の頑張り次第です。テクニクの習得には時間がかかりますが、続けていけば、必ず上達します。



焦らず、1つひとつ身につけていきましょう。

全国の軽音楽部の中には、バンドごとの練習の他に歌や楽器の実技練習をメニューに加えている学校もあります。パートごとに分かれたり、部員全員で「全体練習」を行っている学校も珍しくありません。その内容はメトロノームを使用したパート別の基礎練習や発声練習、リズム練習、音楽理論の勉強、音作りの研究などです。

部活動として軽音楽に取り組み最大の利点（メリット）は、様々なアドバイスを指導を先輩たちから受けられることと言えます。他力本願ではないかもしれませんが、頼りになる相談相手がいることは、とても心強いものです。

バンドを組み、合奏する

軽音楽部では、部員同士でバンドを組み、人気の邦楽曲や洋楽などの既存曲をコピーして演奏したり、オリジナルの楽曲を作詞、作曲したりします。メンバー間でコミュニケーションを取りながら演奏をまとめていくことは、軽音楽部での活動の大きな目的の一つです。みんなが音を出した時の感動と楽しさは何ものにも代えがたいもので、他の部活動や日常生活では、なかなか味わえない貴重な経験と言えます。「そんなことは軽音楽部に入らなくてもできるでしょ」と思う人もいるかもしれませんが、学外で活動する場合、アンサンブルのまとめ方や曲作りの方法、機材の使い方から音作りのコツ、効果的な練習方法などを学んだり、先輩からアドバイスや講評をもらうことはできません。練習場の時間配分は部員数やバンド数、練習場の数にもよるため、学校ごとに違いはあると思いますが、部活動である軽音楽部では、先輩の演奏やいろいろなバンドの様子を見学できるメリットもあります。

バンドの組み方も学校によって様々です。好きな人同士の場合もあれば、先輩や顧問の先生のアドバイスを受けながら決めていくこともあります。また、バンドを固定せず、発表会や大会ごとに組み直すというスタイルを



採用している学校もあります。演奏する楽曲についても、メンバーで自由に決める場合もあれば、先輩や顧問の先生から課題曲を提示してもらえることもあります。さらに、既存曲のコピーが推奨されているのか、オリジナル曲の制作が推奨されているのかも様々で、学校のカラーや伝統、地域性などもあるようです。

どのようにバンドを組んで、どんな楽曲に取り組みうとも、バンドでは自分の意見をメンバーに伝え、話し合っただめていくことが大切です。一生懸命に取り組みほど、意見が衝突することもあると思いますが、そんな時のために先輩や顧問の先生がいてくれるのも部活動であることの利点と言えます。

演奏会やコンテストへの参加

日々の個人練習やバンド練習で積み上げてきた成果を発揮する手段の一つが「ライブ」です。軽音楽部では、文化祭や新入生歓迎会、卒業ライブ、校内ライブや定期演奏会、他校との合同演奏会、各種コンテストや地域のお祭りなど、様々な演奏の機会があります。最初は初心者で軽音楽部に入学したとしてもバンドで一曲でも演奏ができるようになれば、それらのステージに立って演奏するチャンスは誰にでもあるのです。

最も身近な「校内ライブ」は部員はもちろんクラスの友達や先生方に演奏を見て（聴いて）もらう絶好の機会です。軽音楽部による演奏が文化祭の目玉になっている学校も少なくないと思います。まずは、このステージを目標に頑張りましょう。他校との交流が盛んな学校であれば、自校で合同演奏会を主催したり、他校へ出向くことがあるかもしれません。他校のバンドの実力に触れ、お互いを高め合うことができ、新しい音楽仲間にも出会うことができます。

ライブを開催する際には演奏だけでなく、セッティングシートの準備や音響、照明、楽器と機材係といったスタッフの仕事をはじめ、出演順の検討やタイムテーブルの作成、司会による進行管理、お客さんの誘導、ステージ



&会場作りなど、制作側の仕事も軽音楽部員が分担して行います。他校の生徒を迎えるのであれば、誘導や控室の準備も必要です。部員全員が一つのチームになって、音楽イベントに関わる様々な仕事を分担します。大変に感じるかもしれませんが、イベントが無事に終わった時の達成感は格別なものです。

また、近年では軽音楽コンテストや各種大会に出場することを目標の一つとしている学校が多くなってきました。高等学校文化連盟軽音楽専門部や軽音楽連盟が設置されている都道府県では、それらが主催するコンテストや大会が行われ、勝ち上がれば「全国大会」と銘打った大きなステージで演奏することもできます。

講習会やクリニックスの受講

文字通り、軽音楽部は「音楽」をする部活動です。人気の邦楽曲をコピーしたり、自分たちで作詞、作曲をしたオリジナル曲を披露するなど、思い描くような音楽をバンドで奏でられるようになるためには、歌や楽器のテクニックだけでなく、様々な知識が必要です。それは楽器の特性や機材の使い方に始まり、音作りのコツや楽器や機材のメンテナンス、あるいは音階や和音といった音楽理論やコードネームの解釈、コード進行についてなど、多岐に渡ります。さらに、普段の練習方法や基礎トレーニングから作詞や作曲方法、アンサンブルのまとめ方、ライブ前の心得や準備しておくべきことなど、学ぶものや知っておきたい知識はたくさんあるのです。

現代では、インターネットで検索すれば、これまでの事例やいろいろな答えが出てくるかもしれませんが、ピンポイントで痒いところにも手が届くような、自分にとって本当に必要なことは、なかなか見つかりにくいものです。なぜなら、それらはほとんどの場合、軽音楽部という部活動で音楽を学んでいる高校生に向けた情報ではないからです。

高等学校文化連盟軽音楽専門部や軽音楽連盟が設置されている都道府県では、その規模や回数はまちまちですが、ボーカルやギター、



ベース、ドラム、キーボードなどの各パートごとの技術講習会やバンド単位のクリニックが定期的に開催されています。そうではなくても、学校独自に音楽専門学校や音楽教室などから講師を招いて、セミナーを行っているところもあります。「今、聞きたい話」をブローのミュージシャンや音響エンジニアといった専門家から直接聞いたり、アドバイスがもらえるのはとても貴重なことです。部活動であることの大きなメリットの一つと言えるでしょう。軽音楽専門部や軽音楽連盟などがなく、なかなか技術講習会やクリニックに参加する機会もない学校さんは、ぜひ当協会までお気軽にご相談ください。

バンド演奏を録音し、形に残す

日頃の練習の成果を発揮し、披露する場所は定期演奏会やコンテストなどの場での「ライブ」だけではありません。学校によってはバンドとしてのレベルアップを図る目的をはじめ、オリジナル曲を音源（形）に残す目的で「レコーディング」を行っているところもあります。「レコーディングなんて、とてモ〜」と、ハードルが高く感じるかもしれませんが、近年では、意外と簡単に自分たちの手でレコーディングを行うことができるのです。

ステップとしては、①歌と楽器の演奏を録音する②ミックスして、音源データにする③これだけです。以前は、③として「CDに焼く」という作業が当たり前でしたが、音源データのままで聴くことができる現代では、CDにする／しないは自由です。CDに封入するジャケットやブックレットの作成、CDのプレスにはコストも時間もかかりますが、CDとして形に残しておけば、軽音楽部で活動した思い出にもなります。ブックレットに写真も載っていれば、さらに良い記念になるでしょう。

一方で、レコーディングの効果は「思い出し作り」だけではありません。普段の練習にはない緊張感がプレッシャーに打ち勝つ心を強くし、普段は、なおざりにしていた苦手な部



分やウィークポイントへの対処などを個人的にも、バンドとしても改善していくことができます。録音した自分たちの演奏を客観的に細かく聴き返すことで、いつもの練習では気がつかなかったことも発見できるので、バンドの演奏技術が格段に向上します。

とはいえ、プロ・クオリティの作品を制作するには必要はないので、普段使用している音響機材とスマートフォンやタブレット端末があれば、十分にレコーディングを行えます。パソコンがあれば、音楽制作ソフトを使用した高度な作品づくりもできますが、必須ではありません。まだレコーディングを行ったことがない学校は、ぜひこの機会に取り組んでみてください。

合宿に参加し、連帯感を高める

学校によっては、夏休みや春休みなどの長期休みを利用して、「合宿」を行っている軽音楽部が少なくありません。「もっと練習時間が欲しい」「たくさんバンド練習がしたい」「メンバー同士や部員同士の絆を深めたい」といった数々の希望をすべて叶えることができるのが、合宿なのです。

合宿に参加することで得られるものは「個人のスキル」「バンドの一体感」「楽器や機材などの知識」「部員同士の関係の向上」など、多岐に渡ります。学校で行っている普段の部活動とは異なる環境は、自分自身の音楽や楽器への関わり方をはじめ、メンバー同士のつながりを良い方向へと導いてくれます。そして、合宿に参加するにあたり、最大のメリットと言えるのが「時間の確保」です。数日間、音楽以外のことを考えなくても良い期間や思う存分に個人練習やバンドでの合わせ練習に没頭できる時間は、合宿でしか得ることができません。練習後は休憩スペースなどで反省会を行い、次に向けた目標を設定したり、意識を高めることが成長につながります。

もちろん先輩や後輩、自分のバンドメンバー以外の部員との交流も新たに生まれ、軽音楽部全体の連帯感も高めることができます。また、集団行動をする中でしか生まれないコ



ミュニケーションや関係性が育まれ、部員同士やバンドメンバー間の絆を強めてくれるでしょう。

大会出場の常連校は大会前の最終調整のため、部員数が多い学校は連帯感を強めるため、あまり練習ができない環境にある学校は時間を気にせずに練習するため…など、目的は学校によって様々ですが、全員で同じ釜のご飯を食べ、朝礼や夕食後に報告会や反省会を行ったり、いつもよりも少し長めのミーティングを実施することは、部活動としてまとまっていくための大切なプロセスとなります。それに加えて、単純に軽音楽部のみんなまで過した合宿の日々は高校生活の大切な思い出の一つとなるでしょう。

軽音楽部にもマネージメントの発想を…

①運営&活動の方向性

軽音楽部という部活動は現在最も人気のある部活動の一つですが、その歴史はまだ浅く、運営や練習方法、機材や環境整備などのノウハウも少ないため、多くの顧問の先生方が悩まれています。抱えている問題は各校で違うと思いますが、全国の軽音楽部の活動を参考に「運営&活動の手引き」としてまとめていきたいと思えます。

軽音楽部の「前提」

軽音楽部のマネージメントは、部員である生徒のこと、練習場や機材のこと、外部とのつながり…といった項目に大きく分けられると思います。昨今は教員の働き方改革が進み、部活動への関わり方や役割も変化してきているため、直接的な関わりはなるべく生活指導にとどめ、対学校、対外部とのリレーションをメインとすることが理想と思われまます。

部活動の役割は、教育の一環であり、軽音楽という文化芸術を通して教科学習では学べないことを経験し、身につけてもらうことです。原点に立ち返れば、

部員へのマネージメントは「人間教育」、機材は「コスバ」、活動は「経験からの学び」が前提となります。

一方で、部活動の活躍が学校の広報となることもあるため、高校生らしくない言動は控える必要があります。常に学校の名前を背負っていることも、忘れてはいけない前提の一つです。

「軽音楽」と「軽音楽部」

軽音楽部は、表面上は楽器演奏やバンドでの合奏といった音楽の追求、ライブでの発表などが目的ですが、その裏では部活動としてチームワーク（集団行動、作業）や、他者とのコミュニケーション（意思疎通や交流）を学び、加えてクリエイティブティ（創造性）やエンターテインメント（表現力）を育むことが目的にあります。運動部と文化部、両方の効果を持つところが軽音楽部が近年注目されてきている理由だと感じます。

しかし、軽音楽部という部活動を成立させるためには、ポピュラーミュージック

ク（軽音楽）と少し切り離して考えるべきです。いかに肯定的なイメージがあつたとしても、音楽業界は商売であり、どんなに芸術性や自己表現を謳っていても「売る」ことが根底にあります。部活動とは目的が違います。

軽音楽部は、関連学校への進学やプロを目指すなど、卒業後の進路を見据えて活動している人は少なく、高校入学と同時に楽器を始める部員がほとんどという、いわばシロウト集団な部活動です。技術や知識を1から身につけなくてはならないのに、長い年月から培われた現場のノウハウもなく、音楽経験のある顧問も少ない、指導員やコーチのシステムも充実していない…といった状況では、顧問の皆さんが何をどうすれば良いのかわからないのも当然です。しかし、だからこそきちんと軽音楽と軽音楽部をセパレートして、軽音楽部を軽音楽を通して学びの場とすることが大事なのです。

部員のマネージメント

顧問の役割とされる、軽音楽部という部活動のマネージメントとは何か？

練習場に関して相談が多いのが、やはり音量問題です。なんとか音楽室や視聴覚室などの防音設備が整った部屋を週に何日かでも確保できると良いのですが、音量問題に苦慮されている先生方も多いと思います。しかし、電気/電子楽器や機材がほとんどな軽音楽部では、音量問題は唯一のアクセサリー楽器で、し

かも打楽器であるドラムの音量問題と同義語だとも言えます。策としては、タオルなどでガチガチに音をミュートしたり、電子ドラムを導入するといった方法も考えられますが、ライブ本番などで突然本来の姿のアクセサリードラムを叩いた時に、感覚が普段と違いすぎて、いつものプレイができなくなってしまう危険性があります。

機材に関しては、備品として何が必要なのか、どの程度のクオリティが必要なのか、どこで買うのがベストなのか、修理はどうするのか…など、バンド経験や楽器経験があれば悩ましい問題となります。共用備品の範囲が曖昧で、選択肢が多いことも原因ですが、実は「部活動で使うならこれがスタンダード」というものはあります。機材は日進月歩なので、数年経つとオススめも変わるかもしれませんが、コスバが良くて操作が難しくない、大会でよく使用されているものを選びしておくのが良いでしょう。

また、機材の保管や管理についても問題となっている学校も多いのではないのでしょうか。前述したように、電気を使う楽器や機材がほとんどなことに加え、近年ではデジタル機器も多くなっているのので、どんな状況でも湿度や温度、ほこりには細心の注意が必要です。

活動のマネージメント

顧問が行う外部向けのマネージメントとは、機材の購入、演奏を発表する場を作る、大会や講習会に参加するなど、学外の人や団体との関わりのことです。中でも、発表の場を作ることは軽音楽部にとって重要で、文化祭や発表会などの校内で行うものから、他校へ出向いての合同演奏会、大会や各種クリニックなどへの参加が考えられます。

学校との交渉ごとや金銭の管理、外部員に任せるのかは、学校や顧問の先生方

軽音楽部は、バンドが集まってきているわけではありません。軽音楽部という部活動に入部している部員がバンドというチームに分かれているのです。ここは似て非なる考え方で、とても重要です。前者はバンド活動が行動の基盤となり、マネージメントを間違えたと部への帰属意識が薄れていく懸念があります。学校があつて初めて部活動に所属でき、その中でバンドを組んでいるのだという意識が部員には必要です。

部員の退部や休みが多くなる原因の多くは、メンバー間のトラブルなどの人間関係だと思えます。学びの場としては、なんとか自分でクリアして欲しい気持ちもありますが、チームでクリエイティブなことをしているとぶつかることが多くなるのも必然です。それは社会に出てからも必ず起こることですが、バンドが部活動とイコールになっていると、部活動への参加も疎ましくなるでしょう。

全国の学校では、部へのエンゲージメントのために様々な方策がとられていますが、バンドを学期ごとや演奏会ごとに組み直すフリーバンド制にしたり、普段から複数のパートをやらせておいたり…。他にも、反省&報告ノートを定期的に提出させる、部長/副部长などの役員以外にいくつも係を作って割り振る、探めごとが起こった時に本人同士で解決できる対応策を決めておく、保護者への理解を優先する、合宿を行う…など、どれも部活動だからこそできる対策です。

環境、機材のマネージメント

の方針によっても違うと思いますが、演奏発表の機会は社会を学ぶ様々な機会となります。校内で行う部主催のライブでは、音響や照明、スケジューリングなどはじめ、部が一丸となってイベント制作をする組織力が育まれ、他校を招いての合同演奏会ではホスト校として来校者への配慮や気配りを学ぶきっかけとなります。また、発表の場を作ることは生徒のためだけではなく、学校へのインナーブランディングとしても重要です。文化祭でのライブや部主催の演奏会は、軽音楽部の存在を校内や保護者にアピールする大きなチャンスともなります。

県によっては高文連の軽音楽専門部が設置されていたり、軽音楽連盟が組織され、主催する大会では普段会わない他校の生徒の演奏に触れ、見聞を広め、音楽仲間を増やすことができます。また、発表の場を演奏会や大会以外にも求めている学校も少なくありません。最も多いのが、自治体や商店街のお祭りイベントへの参加、高齢者施設や介護施設などでの演奏です。行政や地域との関わりも社会とのつながりを知る機会です。

他にも、各種講習会やクリニックへの参加、合宿の開催、他県への遠征、民間主催の大会への参加…など、普段の部活動から伸展させられることはたくさんあります。働き方改革との折り合いをつけながら行わなくてはなりません。部員に高校時代には経験できないこと、部活動だからできる経験をさせてあげることが、最も大事なマネージメントなのではないでしょうか。



軽音楽部にもマネージメントの発想を…

②部へのエンゲージメント

軽音楽部という部活動は、現在最も人気のある部活動の一つです。しかし、その歴史はまだ浅く、運営や練習方法、機材や環境整備などのノウハウも少ないため、多くの顧問の先生方が悩まれています。抱えている問題は各校で違っていますが、部員、機材活動のマネージメントについてまとめていきたいと思えます。今回は、当事者である部員のマネージメント、部へのエンゲージメントについての考察です。

部活動の目的を踏まえた時に見える

高校生の集団を束ねていくことは大変ですが、部活動を通して様々な経験をしていく彼らにとって、部という居場所は学校生活の中で有意義なところであって欲しいと顧問の皆さんは日々奮闘されていることと思えます。

軽音楽部は、音楽を通して他者とのコミュニケーションやバンドという小規模グループでのチームワークを様々な学ぶことができ、なおかつ自主性と創作性が育まれる部活動です。活動を続けていく中で

なく、集まった部員がバンドに分かれているのだという前提に立ち返れば、様々な方向性が見えてきます。世界には解散後何十年も経って再結成…という例はいくつもあります。経験上イヤイヤ続けてメンバー同士の関係が修復された試しはありませぬ。バンド、音楽は気の合った者同士でやるから発展があるのです。様々な考え方がありと思えますが、1つのバンドに固執することなく柔軟にメンバーチェンジが行われても良いという



は、自分と人を比べて勝手に落ち込んだり、人間関係に悩んだり、責任の重さにプレッシャーを感じたり、創作の苦しみやうまくいかない苦悩に苛まれることもあるでしょう。軽音楽部では、そんな10代の憂悶はバンドメンバーという特別な関係でつながった部員同士の絆や、ライブ本番などでの達成感、何かに向かって進んでいる充実感などでクリアすることが出来ます。もちろん、顧問をはじめとした教員の導きや学校の協力があつてこそです。本人たちの気持ちとは違うかもしれませんが、大人の立場からすれば、彼らの音楽的な成長やテクニックの向上といったことは二の次で構わず、充実した青春を過ごしながら、社会人としてのスキルを身につけてくれることが第一です。部活動というものの真の目的を踏まえた時に、部員への関わり方や接し方も見えてくるのではないのでしょうか。

自発的に、自主的に…

学習指導要領において部活動は、教職

意見も時代的に間違いではありません。仮に採め事が起きた時に備えて、できることが限定されないように複数の楽器やパートを普段から取り組ませておくという学校も多くなっています。しかし、それは人間関係のもつれに至ってしまった最悪の場合に限りません。音楽性（やりた音楽）の違いやアレンジなどでの言い合いは、うまく手綱を引いてスムーズな着地点を見つけさせなければいけません。

なことをしている軽音楽部では意見がぶつかることも当然です。対処としては、

他者との信頼関係の築き方、言葉のチョイス、他者の意見や主張を受容することなど、思いやりや社会性の概念を事前に理解させておくことが求められます。学校が日々行なっていることともいえませんが、火種を事前に察知する策が必要です。

例えば、SNSやDM(ダイレクトメッセージ)の使い方を十分にレクチャーしておく、活動ノートを定期的に提出させ問題の兆候を早期に見出す、全体ミーティングを定期的に行つて孤独感をなくす、先輩が後輩バンドの練習を見回つてトラブルを未然に防ぐ、部内恋愛禁止などが、予防策はいくつか考えられると思います。問題が起きてしまった時にはじっくりと当事者同士が話し合える環境やシステムを整えておくことも重要です。

バンドの組み合わせ方にも工夫が必要

かつての日本社会の考え方は、一度始めたら最後までやり通す、壁にぶつかつてもそれを乗り越えた先に成長がある…といった、「石に上にも三年」的なものでした。個人的にはそういった古い思想も完全否定はできない派ですが、現代は好きなことを伸ばす、無理に嫌なことを続ける必要はないという考え方が主流です。試合に勝つなどの明確な目標がない軽音楽部には、バンドの組み合わせ方も工夫が必要なのかもしれません。

前回も述べましたが、軽音楽部はバンドがいくつか集まってできているのではなく、立ちもつながらることですが、教員の働き方改革にも関係してきます。その状態を作り上げるまでが大変だとも思いますが、理想の部活動化に向けてチャレンジすることが部員をマネージメントしていく出発点とも言えます。

部員やバンド数が多い学校では、いつの間にかヒエラルキーが生まれます。上手なバンド、巧いプレイ、大会で入賞するバンドなど、部をリードするような部員が出てくれば、その陰で鬱屈としている部員も出てきます。手を差し伸べてあげるべきは、当然それらの勝手に落ち込んでやる気がなくなっている部員です。多くの場合、ヒエラルキーの意識は能力差ではなくセルフエスティームの充実感の差であることが大きいと言われています。すべての部員をいかに「リア充」にしてあげられるか…部員のマネージメントとは、

今風に言えば、そんなところでしようか。全国の学校では、前述のように複数の楽器やパートを経験させることで居場所を増やすという方法をとっているところもあります。一歩進めて、本番の機会ごとにメンバーを組み直すフリーバンド制にすることも部活動だからできる有効策です。また、機材係、記録係、会計係、スケジュール係、広報係といった部内の「係」をたくさん作って一任させることは、演奏以外で部に貢献できるきっかけ作りにもなります。任命権を部長や最上級生に与えたり、そういった取り組みを伝統として代々引き継いでいくことが、部の運営を生徒に任せていく道筋のひとつとなるでしょう。

部活動だからできる「リア充」を

部の存在や運営にある程度の形ができたら、日々の活動は生徒に任せてしまうことが理想です。それは、生徒の自主自

帰属意識の大切さ

部へのエンゲージメントは、帰属意識を高めることで増加します。自分がグループの一員であるとの自覚は、集団行動の中での振る舞い方を学ばせます。他者への迷惑を意識した思いやりのある言動、自分が担当していることへの責任感、共有機材や備品を大切に持つ気持ち、目上の人に対する敬意と後輩に対する配慮…など、部活動だからこそ学べることは多いと思えます。一方で、伝統の厳守、大会常勝へのプレッシャー、他校への過度なライバル心など、行きすぎた愛校心も生まれてしまうかもしれません。そのあたりが顧問が行う部員のマネージメントの大きなポイントなのではないでしょうか。

また、学校の部活動であるという意識は、学外の行動にも反映されます。制服を着てギターを抱えていることの重大さを部員はしっかりと理解していなければいけません。一般の高校生バンドの帰属意識は、友人と組んでいるバンドそのものだけにがちですが、もう少し視野を広く、帰属は部活動という団体や学校という機関にあり、ひいては社会という世界とつながっているのだと学ぶきっかけともなります。

軽音楽部にもマナー・ジメンの発想を…

③ 機材・環境のコントロール

軽音楽部という部活動は、現在最も人気のある部活動の一つです。しかし、その歴史はまだ浅く、運営や練習方法、機材や環境整備などのノウハウも少ないため、多くの顧問の先生方が悩まれています。抱えている問題は各校で違ふと思いますが、部の運営に必要な部員、機材、活動のマナー・ジメンについて考察してきました。第3回目となる今回は、部のソフトウェアである、機材や備品、練習環境などについて考えていきたいと思います。

機材の購入

ポピュラーミュージックはたくさん楽器や機材を使います。そして、そのほとんどが電気・電子楽器であり、音を出すための周辺機器や備品がさらに必要になります。きちんと機材を揃えたい、増やしたい、買い替えたいと思っても、生徒会からの分配金ではなかなか賄いきれる分量ではありません。

解決策としては、部費の徴収を始めた増額する、知り合いや保護者から提供

してもらおう、顧問が自分の機材を寄付する、近くの学校と余っているものを交換し合う…などが多いようです。

近年では、音楽機材専門の大手ネットショップや楽器店のネット通販もあり、製品の詳細も事前に把握できるため、購入は比較的楽になりました。また、オークションサイトやフリマアプリ、地元で不要なものをやり取りするサイトやネット掲示板などを活用すれば、費用を抑えられるかもしれません。

しかし、機材それぞれにランクや互換性、仕様の違いがあり、具体的にどの機種を選べば良いかの判断は簡単ではありません。ポインとは、大勢が共用で長く使用する「備品」として最適かの見極めです。例えば、より多くの場所が使われているスタンダードな機材は、他校に遠征したり大会に出場した時などで扱いに戸惑うことが少なくなります。また、他の電化製品同様、音楽機材もデジタル化、小型化、高性能化、低価格化が進んでいます。ステレオタイプなイメージにとらわれず、現在と未来を見据えた機材を選

ぶという考え方がお勧めです。すべての機材について詳細にお伝えするのは難しいので、お困りのことがあれば当協会までお気軽にご相談ください。

「マイ楽器」の線引き

機材に関して意外と重要なのは、どこまでを「マイ楽器」とするかです。マイ楽器とは、部員が持参するべきものという意味です。例えば、ギターリストならギター本体は持参、ギターアンプは学校の備品となっていると思います。

では、シールドケーブルはどうでしょう。ギターリストはほとんど自分で持つてくると思いますが、キーボードイストは学校のものを使っていることが多いのではないのでしょうか。一昔前のキーボードは高価で重く、ドラムセットと同じように学校の備品であることが一般的だったため、周辺機材であるケーブルも学校の備品として揃えておくことが通例でした。しかし、音作りの面からもマイキーボードを持参する部員が多くなってき

習場所の確保に困ってしまうというジレンマに陥っていきます。また、音の響き方に関する問題は、音楽室や視聴覚室などを使用する場合と、普通教室を使用する場合とでも違いは出てくるでしょう。

音量問題は、中には「騒音問題」と揶揄されるほど、校内では煙たがられてしまっている学校も多いのではないのでしょうか。しかし、クラシック音楽や吹奏楽は人数を増やすことで音

量を稼ぎましたが、ポピュラーミュージックは電気音を増幅します。逆説的に言えば、ドラム以外の楽器は音量をある程度抑えることが可能です。すなわち、音量問題対策は打楽器であるドラムと、肉声を駆使しているボーカルへの対応がほぼすべてです。ドラムは、本来のサウンドを失うほどヘッドにガムテープをがちりと貼ってしまうことも解決策の一つです。また、セツトの下にマットを敷くと床のキズ防止

や滑り止めになるだけではなく、防振・防音にもなります。バスドラムには毛布などを詰めたり、フロントヘッドを外してしまうことも有効です。近年では、ヘッドに置いたり、シンバルに貼る練習用消音ツールも発売されています。

ボーカリストには、自分の歌（声）を返すモニタースピーカーを用意することで、P.Aスピーカーの出力を抑えることができ、さらにはピッチの安定、大声を出して喉を枯らしてしまうことの予防につながります。P.Aスピーカーをボーカル用モニターと考えるのも良いですが、キーボードやアコースティックギターなどと一緒に出す場合はバランスが取りにくくなります。バンド練習の総音量基準は、きちんとボーカルが聴こえるかどうかです。練習を見回って適切な音量で練習しているかをチェックすることも、マナー・ジメンのうちかもしれません。

機材の管理、保全

部活動で使用する機材や備品は、当然ながら長く使いたいものです。そのためには、部員に正しい扱い方や保管方法を行き届かせる必要があります。特に、部活動のたびにドラムセットやアンプなどを倉庫などから運ばなければならない学校では、壁にぶついたり、壊したり、ケガをしないように慎重な扱いが望まれます。機材は精密機械も多いため、重いものは台車を使う、必ず2人以上で運ぶ、滑り止めのついた手袋を使用するといっ

現在では、ケーブルも持参することが多くなっています。また、たとえキーボードを学校の備品としている場合でも、自分のケーブルは持参するというルールもおかしいことではありません。

ボーカルマイクについても、昔と状況は変わってきています。街の練習スタジオでもライブ会場でもマイクは常設が一般的な考え方なため、マイク本体やマイクケーブル、マイクスタンドは備品であることが普通です。しかし、コロナ禍以降は衛生面からもマイクを購入するボーカリストが増えています。音響システム上の問題から、マイク交換時のオンオフに注意が必要だったり、現状は機種をSHURE（シユア）社のSME5に限定しておくことが推奨されますが、マイクを使う人数の多い学校では検討しても良い案件だと思います。

他にも、ドラムのペダルやスネア、ギターのエフェクターなども、マイ楽器としても良いでしょう。備品購入の費用削減とは関係ありませんが、サウンドやプレイへのこだわり、どこでも同じ条件で演奏できる安心感のためには有効です。入部したばかりの新生入生にも徐々にマイ楽器に対する興味を持たせることも、機材コントロールの一環です。

練習環境の整備

軽音楽部は、いくつかのバンドに分かれて活動するため、練習場所が複数必要になります。部員が増えて、バンド数が増えれば増えるほど、練

たルール作りも有効です。

前述のように、軽音楽部で使用する機材は電気・電子機器がほとんどです。通電のオンオフの順序間違いや、溜まったホコリが故障の原因になることもあります。また、保管状況は様々だと思いますが、木製や鉄製の部品も多いため、湿度と温度に注意して、できるだけ換気をよくすることが理想です。また、基本的に置き勉ならぬ部員の「置き楽器」は、責任問題も含めて避けたい方が賢明でしょう。

部には、頑張つて調達した機材や過去に先輩たちが購入した機材もあれば、現部員の代で購入したものもあるかもしれません。どちらにせよ、それらはすべて未来の部員へ引き継いでいくものだという意識が大切です。自分たちが使っている機材を、卒業後も後輩が大切に使用していると知ったら、きっと感動すると思います。部の備品は部の財産です。道具を大切にする気持ちも同時に部活動で学んでいってもらいたいと思います。

とはいえ、どんなに大事に使っていても機械はいつか壊れます。調子が悪くなったり、壊れてしまったら修理が必要です。予備の機材がない場合は練習に差し支えてしまう可能性もあります。修理に出すべきか、廃棄するべきかの判断や、代用品をどうするのかといった問題のクリアは簡単ではありませんが、悩んでいるうちに使用しない機材が部室や倉庫に溜まっていく…なんてことも少なくありません。学校との相談が必要な場合もあると思いますが、速やかな処置を検討しましょう。



顧問の役割のひとつとされる、軽音楽部という部活動のマナー・ジメンとは何か？

軽音楽部にもマナー・ジメンの発想を…

④活動のハンドリング

軽音楽部という部活動は、現在最も人気のある部活動の一つです。しかし、その歴史はまだ浅く、運営や練習方法、機材や環境整備などのノウハウも少ないため、多くの顧問の先生方が悩まれています。抱えている問題は各校で違いますが、部の運営に必要な「部員」「機材」「活動」のマナー・ジメンについて考察していきます。最終回の今回は、未来志向な日々の活動の方向性について考えていこうと思います。

時代に合った活動を

現在、教員の働き方改革や部活動の地域移行、少子高齢化など、部活動に関する環境やシステムが大きく変わろうとしています。中には、部活動そのものを根本から見直すべきではないかという意見もあるほどです。部活動とは何か、今後どうあるべきかは、国や自治体の方向性だけに任せておくのではなく、学校ごと、部活動ごと、さらには保護者や地域住民、国民全員が日本の未来の教育問題として捉える段階に入ってきています。

軽音楽部という比較的新しい部活動では、単に楽器やポピュラーミュージック（軽音楽）の追求だけではなく、文部科学省の言う「社会的自立と社会参画の力を育む教育」：すなわち、自分の意見を持つて様々なディスカッションできる社会人、主体性を持ち、発信力のある社会人になるためのスキルを育む活動が可能です。社会が上位下達の時代から個性や多様性を尊重する時代に変化している今、軽音楽部がそれらを肯定的に内包し、現代、そして、未来を担う日本人像にマッチした部活動であると感じられている方も多いのではないのでしょうか。逆説的に言えば、そういった部分を重視し、時代に合った活動へのハンドリングが求められているのだとも言えます。

「社会性」を育むこと

個々の多様性やアイデンティティを大事にしながら、「バンド」というチームの中で主張と妥協を繰り返し、演奏や楽曲を作り上げていく行為は、社会に出てか

ら大いに役立ちます。民主主義では、常に複数人で協議して、個々がその結果に基づいた行動と結果を期待されます。それは、何も仕事に限ったことではありません。日常生活での円滑な人間関係の構築においても同様です。

そういった意味でも、学校、特に部活動では普段から連帯意識や集団意識を育む活動が望まれます。具体的には、時間厳守や挨拶には始まり、いわゆるホウレンソウ（報告、連絡、相談）の徹底、提出物や締切期限に対する責任感、他者に迷惑をかけず、感謝を忘れないこと、共用物を大切に扱う気持ち：などです。特に人間関係に関する、ディスカッション能力や多様性を認識し、他者を認めること、感情のコントロール、SNSの危険性の把握：といった、現代人にとって大事な社会的スキルはバンドという小さなチーム、部活動という小さなコミュニティの中で様々な育まれていきます。

これらは軽音楽部の活動の中で、テクニックの向上や良いオリジナル曲を作ることよりも大事な事柄です。それらが

社会に出るためのスキルを育む

軽音楽部はその性格上、学べる（経験できる）事柄に幅があります。部員数や練習場所の数などによっても大きく変わるとは思いますが、普段の活動では、楽器・歌の技術向上やアンサンブルの理解といったポピュラーミュージックへの造詣を深めること他にも、楽器、電気・電子機器、音響、照明、楽曲創作（作詞、作曲、編曲）、DTM：など、音楽に関して興味を持つことや学べることはたくさんあります。

また、校内ライブや合同演奏会などのイベントを制作した場合では、その規模にもよりますが、企画＆プロデュース、運営、マネタイズ、スケジュール管理、マーケティング、宣伝＆広報、プログラムやポスター作成、アテンド：など、エンタメ業界を疑似体験することも可能です。もちろん、これらは音楽業界だけではなく、様々な業界で行われているイベントに転嫁することができます。

さらに、部長などの役割につけば、部員の士気を高め、団結力を強めるリーダーシップ、運営の方向性や持続を保つ行動力、部員の関係性を把握し、まとめていく責任感などが養われます。音響係、照明係、映像係、機材係、スケジュール係、連絡係、バンドリーダーといった、幹部職を経験することも同様に社会人としてのスキルを育む体験となります。言うまでもなく、これらは軽音楽部に限ったものではありませんが、一つの部活動の中にバンドという小単位のチームが複数あ

成することは二次的要素であり、真の目的ではありません。

活動の根本にあるべき理念

基本的に、普段の練習は上級生が主導するべきです。指導員がいたとしても、練習メニューやスケジュール管理、練習場所のローテーションといった実際の運営は、生徒自身が主体となって行うことが大切です。顧問や指導員が活動そのものを引っ張っていると、いつになっても「やらされている感」が払拭できません。周りの大人はサポート役に徹している方が、生徒たちの成長や部の継続のためにも有効です。時間をかけてでも、生徒主体の状態に持っていくことがハンドリングの要だと思われれます。

実際の技術面やアンサンブルの指導に関しても、顧問や指導員のオーバードプロデュースに注意することが大切です。専門的な知識がある方もそこはグッと我慢をして、基本は先輩が後輩を指導し、自分たちで答えを見つけてさせていく活動が理想です。うまくいかなくても失敗から学ぶこともありえます。普段の練習は個人練習、バンド練習、ライブ練習と内容と目的をしつかりと分けることで、目標を設置することができます。

また、軽音楽部は「バンドが集まってきているのではなく、部員がバンドに分かれているのだ」という原則に立ち返れば、部員全員で行うミーティングや全体練習を日々の活動に取り入れることも効果的です。部長や幹部部員を中心に、

る：という形は軽音楽部特有のもので、より一層のリーダーシップが必要となり、大きな経験となるでしょう。

部活動が社会へ出るためのスキルを育むためのものであるのであれば、軽音楽部はより多くの経験をさせてあげられる部活動なのと言えます。学校教育の環である部活動は高校時代の良い思い出となるだけではなく、その後の人生においても様々に関わりを持つていく場合もあります。中には、プロ（仕事にすること）やオリンピック選手を目指したり、推薦入学をはじめとした関連校への進学、関連会社への就職など、専門的な道を希望して将来が変わっていく可能性もあります。

明るい未来を見せること

高校時代に社会との様々な接点を作り、視野を広げさせるとい意味では、普段から学校を飛び出して地域との関わりを持つことも有意義な活動となります。軽音楽部はバンドごとの少人数での行動が可能のため、地域のお祭りへの参加や高齢者施設への慰問などは他の部活動よりもハードルが低い場合もあります。

生徒たちが将来、社会に出た時に軽音楽部という部活動を通して得たものが「強み」となってくれること、明るい未来を見てくれることが、最も大きな「部活動のマナー・ジメン」となるのではないのでしょうか。

文・辻 伸介

特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会
副理事長

